

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.27

平成16年4月1日

横浜能楽堂『第十五回催花賞』を受賞



会長 新堀 豊彦

とにした。

この賞は服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して、昭和六十三年（一九八八）四月に、「服部記念法政大学能楽振興基金」が設定された。この基金に基づく事業の一つとして、能楽三役の功労者並びに能楽の普及・発展に貢献の大きい個人団体を顕彰するために設けられたのが「催花賞」である。

観世新九郎家伝来の「催花」の額に基づいて、この名がつけられた。

平成十六年一月十五日、夜。東京赤坂プリンスホテルにおいて、法政大学の主催する、第二十五回観世寿夫記念法政大学能楽賞と第十五回催花賞の贈呈式があり、能楽堂の関係者としてお招きを頂いた。

法政大学能楽賞はかねてより能楽界では権威のあるものとして承知していたが、催花賞に関しては、うかつにもよく存じ上げなかった。

その催花賞を横浜能楽堂が受賞したということで、能楽堂の最大の利用者であるわが能楽連盟においても、その榮譽について、理解を深めておく必要ありと感じたので、書かせて頂くこ

が受けており、今回の横浜能楽堂の受賞は異例のものであると言えよう。

受賞の理由については、今さら書くまでもないことと思うが、今日まで七年余の間、「こども狂言ワークショップ」を始め、「プランチ能」「バリアフリー能」などの企画や、学術的な復元能「秀吉が見た「卒都婆小町」」の如き実験作の上演や、数々の他に例を見ない新しい企画を山崎有一郎館長を中心に打ち出し実現した活動についての評価によるものである。

館そのものの活躍が、こうした形で賞を頂いたということは、横浜市民として、又、能楽堂の利用者としても嬉しい限りであり、これを機会に、能楽堂がより一層の努力をされて、さらに大きな成果があげられることを期待するものである。

今年は、第五十二回横浜能が十一月十三日（宝生・大坪喜美雄師「三井寺」と十一月二十三日に観世流梅若会・梅若六郎師、「砧」——梅若恭行追善能が行われる。私たちは、全くオーソドックスな演能を積み重ねて半世紀を上まわる実績をつくったが、これも又、能楽界にとって、大きな道をつくり上げて来たものと確信する。いずれにしても、能楽堂なかりせばといえるので

あつゝ 横浜能楽堂のさらなる発展を祈念したい。

平成十五年度の総括

総務担当 鈴木 力雄
常務理事

今年度は、四月の総会において承認された活動計画に則り、主催事業である横浜能、横浜五流能楽大会、五流交流のつどいをはじめ後援事業、会報の発行などを実施した。

特に、第五十一回横浜能は、地元の若手能楽師による第一回として、平成十五年十一月八日に観世流 岡本房雄・田辺哲久の両師により「一角仙人」が演能された。チケットは完売、見所は満席の盛況であった。

また、第十九回「横浜五流能楽大会」を平成十五年九月十三日、第七回「五流交流のつどい」を平成十六年二月十四日に開催した。

組織広報の面では、横浜における能及び謡曲、仕舞等の普及活動が、我々の使命であります。昨今、会員数の減少や謡人口の減少が案じられている。

これらの減少対策のための資料収集の試みとして、昨年八月から今年一月の間、横浜能楽堂のご協力を得て観能に来られた方々へのアンケート調査を行った。その結果、入場者数に対する

集計率は、十パーセントを超えたのが一回だけで、あとの四回は、七〜二パーセントと低く、関心の度合は極めて低調であった。このことは、連盟会員数の減少と相俟って危機感を覚える状況と言えよう。

第七回「五流交流のつどい」を終えて

当番幹事 三谷 光子
観世流梅若会

風が春一番を運んできた二月十四日、横浜能楽堂本舞台で第七回「五流交流のつどい」が開催されました。昨年九月、「五流能楽大会」が終りましてから、各流派の方々には、演目は、人数は、お名前はお願いをしまして、そのお返事をまとめ、番組を作り、校正、そしてお届けまで、思えば馴れない仕事で忙しい数ヶ月でした。

役員の方々には御迷惑をおかけいたしましたこともあったかと存じます。あらためて御礼とお詫びを申し上げます。

今回の当番は、観世流梅若会が担当でございましたが、幹事全員で話し合い、知恵をしょうりました。会員の皆様にはご不満もおありかと存じますが、皆で力を合せて、楽しい会になるよう努力いたしたつもりでございます。

当日は、昼ごろから予定時間が遅れ気味で、担当の私どもはひそかに心を痛めながら、観客席と楽屋をウロウロしていたのでしたが、何組かの出演の方々の気くばりもございまして、約束の時間びつたり千秋楽になることが出来ました。私も出来るだけ出演される方々を観客席から見せて頂きましたが、一生懸命は勿論ですが、楽しそうに舞台上に上り、舞い、謡い、太鼓を扱っていらつしやるお姿を拝見出来まして、これが本当に「つよい」の姿であるのだろうかうれしく思ったのでした。

しかし残念ながら少し課題も残りました。まず自分の出番が終りますと、人様の演目を見ることもなく帰ってしまう方が少なからずおられました。謡曲を愛して学ぶのでしたら、同じ心を持つ他の人々のことも考え合せて拍手をしてあげて欲しかったと思うのです。又、キャリアバックで自分の着替えなどを持って来られた方がおりましたが、楽屋には持ち込めませんので今後充分注意してほしいものですし、杖を必要となさる方もおられました。杖先を柔らかいもので包むなどの心くばりをお願いしたいものです。

それぞれの事情もありでしょうが、皆さんで助け合って、

楽しい会を続けることにいたしましょう。

宝生流教授嘱託会神奈川支部 結成四十周年の記念事業報告

宝生流 吉田 澄夫

宝生流には家元の免状を頂いて、初心者に謡や仕舞を手ほどきできる教授嘱託という資格があります。

神奈川県に在住の有資格者が中心となり、教授嘱託会神奈川県支部を結成して以来、昨年に四十周年の節目にあたります。これを記念して二つの大きな事業が横浜宝生流連合会と共同で実施されました。

関係各位のご支援を受け無事成功裡に終えることが出来ました。私は縁あって二つの事業に携わりましたので、その概要を紹介いたします。

一つは記念誌「神奈川宝生流の流れ」の発刊です。

これは明治、大正、昭和から平成の今日に至るまでの、横浜を中心に行われてきた当流の演能や種々の活動の記録や資料を散逸しないうちに可能なかぎり集め、整理して後世に残す資料集を作ろうとの願いから始められました。

九名の編集委員が毎月一回集まり、記念誌の全体構成、執筆

者の選定や章立てなど議論を積み重ねました。その結果、長老の方々の座談会による昔話の披露や、会員諸兄弟の能や謡に寄せる思いをエッセイに纏めたり、渡井前支部長、新堀現支部長に資料や記録では分りにくい当流の活動について執筆を願うなど、読み物としても面白い、盛り沢山の内容となりました。

加えて神奈川に縁の深い当流の先生方、高橋 章、塚田光太郎、大坪喜美雄、前田親子各師の序文と横浜能楽堂館長の山崎有一郎氏の寄稿を得て、錦上花を添えることができました。

一年という短い時間内に編集作業を終えて、昨年十二月予定どおり神奈川新聞出版局から刊行し、会員に販付するとともに関係諸団体やご支援を賜った各位に贈呈することが出来ました。(この小誌は一般書店ではお求めになれません。ご関心のある方は秋山宅電話〇四六―八七三―四五八三まで)

もう一つは講座「鶴亀・高砂謡おう会」の実施です。

能を観る人は増えているのに、稽古する初心者が増えていないという状況をどう打開したらよいかは、五流すべてにわたる緊急の課題であります。

当流では、同じ危機感を持つておられた横浜在住の大坪喜美

雄師にお願いして、全く謡曲に接したことのない初心の方々を対象に、祝言謡として名高い鶴亀や高砂の小謡の手ほどきをしていただくことになりました。

企画当初は、受講者が集まるか不安でしたが、横浜能楽堂や神奈川新聞等のご協力もあり、開講時には会場の横浜能楽堂第二舞台の見所は、定員六十名を越える受講者で一杯になりました。

講座は十月から今年一月まで、都合八回開かれ、一月三十一日には発表会が行われました。



発表会当日は、受講者のお知り合いも数多く来場され、第二舞台の見所は超満員の盛況のなかで、受講者が男女数組に分かれて能舞台上に上って地頭 大坪先生のもとで小謡を連吟し、日頃の実果を披露し合いました。

その後、抽選で選ばれた受講者による地謡をバックに嘱託会有志の仕舞や、嘱託会メンバーによる模範仕舞が続き、大坪先生の番外仕舞「難波」で舞い納めました。

この講座の終了後、能楽に興味を持ち引き続き稽古を続けたという希望者は、グループ稽古で六名、個人稽古で四名、計十名に達しました。

これも大坪先生の熱心な指導と、献身的に講座を支えた嘱託会メンバーの努力があったが故、と関係各位に感謝しつつ筆を擱きます。

謡曲との関わり

喜多流 今富 博愛

私と謡曲との関わりは、思い出すと記憶も薄れ勝ちですが、私が二十代の頃水道橋の能楽堂で観能したのに始まります。

既に四十五年前のことです。それが縁になったのでしょうか勤め先の宿直室で同僚の職員方と一緒に、中年のご婦人から宝生流の謡の稽古を受けました。

更に横浜勤務のときにも庁舎内の和室で、ご婦人の先生から今回は観世流の謡を数回習いました。

言うまでもなく、この時は全く場当りで足が痺れた記憶しか

なく、曲目が何だったか全く頭に残っていません。
私も四十才台になって、余暇に興味を持ちたいとあれこれ模索していました。

その頃、知人に事務所近くの料理屋にお昼時に案内されたとき、雑談のなかで、そのお店で月に、二回程先生が来られて同好の士が謡の稽古を受けていることを耳にしました。

私も勧められ、謡は高齢になっても楽しむことができると、心を動かしました。

数日後に「仲間に入れてください」とお願いし、先生のお許しをいただきました。

稽古当日、先生が能楽界で著名な友枝昭世師、流派は喜多流であることを知った有様です。

稽古は六・七人の仲間と一緒に一節ずつ先生が唱われた後に続いて鸚鵡返しで習いました。テープレコーダーにも入れて復習に備えました。

私にとつての驚きは、先生は全く謡本を見ないで指導されたことです。私はそのような先生に就いて習ったことがありませんでした。

後日、私も仲間うちで曰く「先生一流、生徒四流」。四流生徒にとって、一流先生は恥ずかしながら自慢の種です。

次いで、失敗譚を一つ披露し

ましょう。

稽古を始めてあまり日も経たないうちに、能舞台上がることになりました。

演目は覚えていませんが、緊張して謡い終り「やれ嬉れしや」と立ちあがろうとしたときに痺れて足の感覚が全くなく、足を上げて床に足を着けるも力が入らず、宙に浮き、体は引っくり返って、見事舞台脇に落ちてしまいました。

しかし、幸いにも、観客は少なく大恥をかくに至りませんでした。それも二十五年ぐらい前になりました。

久良岐能舞台の今昔
観世流 高岡 幸彦

久良岐能舞台の今昔

観世流 高岡 幸彦

私は磯子に生まれ磯子で育った。そして齢八十を超える今になっても磯子に住みついているので茲七十年余りの磯子の変遷を見つめて来た。その間磯子の変わりようは大変なものである。

今、バス停 浜からプリンスホテルの坂を登り岡村へ抜ける道を旧道といっているが、今の十六号線は大正初期埋立によって出来たもので当時これを新道と呼んだ。旧道は並行しており、現在のプリンスホテルの下をトンネルで抜け屏風が浦から杉田

へ通じていたのである。

そして、その旧道から岡村へ抜ける道は今のプリンスホテルのある所に東伏見の宮様のお邸が出来た時に造られた道であり、その時昔のトンネルは埋められた。

この道が出来た当時は宮様のお邸以外はこの付近に建物はなく岡村に向って左側は田んぼであり右側は畑であった。そして笹堀の辺りには火葬場が一軒ボツンと建っていた。

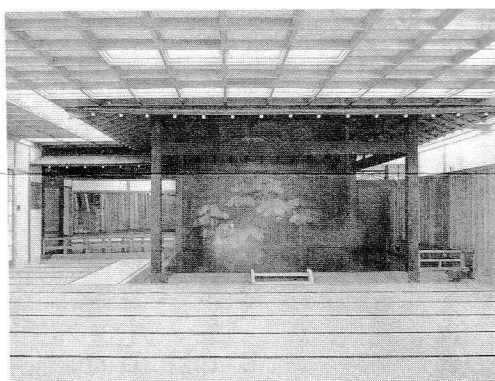
それが昭和三十年代前半頃から汐見台団地が出来て、田んぼは団地になり、周囲の状況は一変した。田んぼは団地と変り昭和三十年代後半から汐見台周辺に一般の家も建ち始め、笹堀の辺りに商店も見え始めた。そして昭和四十年にパイロットの宮越賢治さんが今の久良岐能舞台を建てられたのである。

私は学生時代から謡曲を習っていたので会社勤めをするようになってからも謡曲の会に何回かこの舞台を貸して頂いた。その頃この舞台は周囲の環境もよく春秋は大変気持よく謡いを楽しめたが、冬は寒く、夏は蚊に悩まされた。蚊取線香を焚きながら謡を謡ったのも懐かしい思い出である。

今能楽連盟の顧問をやって頂いている岡幸男さんはその頃の

謡曲を通じての友である。

その後、宮越さんが昭和六十年頃、この舞台を市へ寄贈され、市も大掛りな改装をされ立派な舞台となった。



新装なった舞台は当時の磯子区長を中心として久良岐能舞台の館長や我々の地元の人、謡曲を嗜む者がよりより集って毎年その一年の運営を相談した。後には能楽連盟の代表も加わり、各流の謡曲仕舞を志す人の為にウィークデーは流派別に初心者指導教室となった。各流は二年を原則として安い授業料で新人の開拓をした。但し観世だけは希望者も多いので初級の外に中級も設けられた。そしてこの卒業生は更に先生について稽古を続ける者、同じ趣味の集いとして杉田や浜小学校でサークルを組んで謡曲を楽しむ者等あ

て地域の文化の向上に大いに貢献してきた。磯子文化協会の春秋に催される「謡曲と仕舞のつどい」には各流の現在稽古中のものと卒業生が相交じって謡曲仕舞を楽しんできた。

我々が夢にまで見、街頭で署名運動をした横浜能楽堂が平成八年に完成した事は大変嬉しい事であったが、横浜市芸術文化振興財団が出来、横浜能楽堂と共にこの能舞台も管理運営することになってから能舞台としてあまり顧みられなくなってしまう。

各流の謡曲仕舞の教室は廃止となり貸舞台となってしまった。その案内には日本舞踊、民謡、三曲、横笛、茶道、吟詠、句会などの利用が記され、現在日本舞踊の稽古が募集され「能舞台での日本舞踊の教室」として地元では評判になっている。

横浜能楽連盟で三十数年間横浜能を維持し、久良岐舞台で新人の開拓に勤めてきた筆者には大変淋しい現実である。横浜能楽連盟は全員ボランティアの集まりである。従って過去の会合や横浜能の実施について交通費すら支給した事はない。又ボランティアである為構成員に能楽師は参加していない。然し素人として師範の資格を持ち、現在弟子を指導している者は五流各

流派にはおられると思う。横浜能五十年記念には能を抜いた者もいた事は周知の事である。従来の方法では経済的に謡曲仕舞の教室が成立しないならば、能楽連盟が主催すれば利用料も入り、能の原点である謡曲仕舞の教室として、能舞台の本来の姿に久良岐舞台を蘇らせる事が出来ると思う。又そうありたいと願ってやまないものである。そのなればこよなく能を愛し、市に能舞台を寄贈された宮越賢治さんも泉下で喜ばれる事と思う。

(連盟副会長)

雑感

観世流 溝口 法子
梅若会

謡曲を習いだしてより二十五年余りを振り返って見て長かったと自分で感心して居りましたが、私のまわりには五十年、六十年という方が大勢いらつしやるのを聞いて自分はまだひよつ子だなあと改めて認識しました。

一曲を習い終って本当に曲を理解しそれを自分のものにするのはまだまだのようです。このような姿勢で習っているのでは仲々上達しそうにありません。曲を理解するという事は本当に難しい事だと思ひ知らされました。

能楽というものが単なる古典

芸術の一つと理解しておりましてが仲々そうではなく今の若い人達は習うというよりは学ぶという姿勢で能を鑑賞して居られるのには感心するばかりです。

古い時代に固執するのではなく現代にそつて人の心を捉えながら復曲や、新作能等に携わつて居られる有識者、能の宗家の方々の大変な御努力に頭の下る思いがします。今更ながら時代の変化というものが私の頭で考えているのとは関係なくどんどん進んで行くようです。私の立場から申しますと能楽を鑑賞する機会はいくらでもあると思つて居りましたが一般の人々は遠い世界のように言われる方が多く簡単に手の届く世界ではないようです。よく聞きますと退屈だし何を言っているのか分からなからという答が返つて来ます。唯能衣装の豪華絢爛さには非常に関心を持つておられるようですがそれまでです。でも能楽を鑑賞される人々は確実に増え続けておりますが謡曲や仕舞をやるうとする方は残念ながら少ないようです。

シェークスピアの戯曲に勝るとも劣らない日本の戯曲と聞かされ、今更ながら自分の習っている謡曲を改めてよく読んでみますと大変素晴らしい文章と科白の微妙な掛け合い等これを作ら

れた世阿弥と言う方は全くの天才という外はありません。その世界に少しでも参加させて頂いている自分は幸せ者だと深く深く痛感しています。

人生の終末を迎えつつある者にとつてこれからどれだけ謡曲の真髄に近付けるか疑問ですが一生懸命精進したいと思つております。

能楽堂より

四月・九月の公演

横浜能楽堂では、次のとおり公演を開催いたします。

「企画公演 ワキとシテ」

第一回・四月十日(土)

午後二時。

能「井筒」(観世流) 梅若六郎、宝生閑。

第二回・五月一日(土)

午後二時。

能「張良」(観世流) 梅若六郎、宝生閑。ほか一調など。

第三回・五月二十九日(土)

午後二時。

能「羅生門」(観世流) 大槻文蔵、福王茂十郎。

第四回・七月十日(土)

午後二時。

能「谷行」(観世流) 梅若六郎、宝生閑。

第五回・八月二十一日(土)

午後二時。

能「檀風」(観世流) 大槻文蔵、福王茂十郎。

第六回・九月十九日(日)

午後二時。

能「翁」・開口・能「高砂八景」(観世流) 大槻文蔵、福王茂十郎。

午後二時。

能「檀風」(観世流) 大槻文蔵、福王茂十郎。

第六回・九月十九日(日)

午後二時。

能「翁」・開口・能「高砂八景」(観世流) 大槻文蔵、福王茂十郎。

第一回から第五回はS席六千円、A席五千円、B席四千円。

第六回はS席八千円、A席七千円、B席六千円。

チケット発売中

「普及公演」

「バリアフリー能」

六月二十日(日) 午後二時。

能「羽衣」(金剛流) 松野恭憲。

狂言「墨塗」(大蔵流) 善竹十郎。

正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。介助者一名まで無料。

チケット発売は五月十五日(土) 窓口・電話・FAX・Eメールで午後二時から。

「特別公演」

六月二十六日(土) 午後二時。

狂言「八尾」(大蔵流) 山本則俊。

狂言「文蔵」(大蔵流) 山本則直。

狂言「庵梅」(大蔵流) 山本東次郎。

S席は八千円、A席七千円、B席六千円。

チケット発売は四月二十四日(土) 窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

お問い合わせ・お申し込みは、〇四五(二六三) 三〇五五まで。

編集後記

能楽連盟は今、二つの問題を抱えている。それは「会員数の減少」であり、「稽古する初心者が増えないこと」である。

この問題の解決に資すると思われる報告、提案がありました。その一つは、「宝生流の記念事業報告」のなかの「鶴亀・高砂を謡おう会での初心者指導」の実施報告。

もう一つは、「久良岐舞台の今昔」のなかで「久良岐を愛し、久良岐で初心者指導をしてきたことを原点にして、久良岐の進む方向」の提案。

以上二通の貴重な寄稿がありましたのでご紹介します。

皆様のご意見をお待ちしております。

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合

〒233-0013 横浜港南区丸山台二丁目

FAX 〇四五(八四四) 二九〇三

電話の場合

横浜能楽堂 原田由布子

TEL 〇四五(二六三) 三〇五〇